

青年期の発達課題と作文教育についての1考察

一塚 正紘*

要約

著者は、文学の講義内容を文学作品鑑賞と作文教育の2本柱として設定した。著者の意図する「作文教育」は、与えられた課題について書くといった受身のものではない。それは次の内容の活動を指す。①学生が自己の生活のなかから課題を見つけ出す。②自己または他者に向かって自由に文章表現する。③作品を読み合い、自己も他者も共に学び交流する。

この作文教育は、青年期の発達課題の重要な部分を占める他者理解・自己認識・自己表現と深くかかわるものである。また、学生の作文に対する「好き意識」「苦手意識」の背景には、過去の作文教育における肯定的な経験と否定的な経験が反映している。

それらを実証するため、作文教育を次のように展開した。①自由に作文を書く時間を設定する。②作品のテーマ分析から見えてくる特徴をつかむ。③個々の作品を、集団で読み合う時間を設定する。④個々の作品から、教師も学生も共に学びあったことを交流する。

最後に、実践の成果と問題点をまとめ、本稿の課題に迫った。

キーワード：青年期の発達課題 他者理解 自己表現 作文教育

2007年9月18日受領（実践研究）

はじめに

著者は、今年度より本学子ども福祉学科1年生を対象に「文学」の講義を担当することになり、その講義内容を文学作品鑑賞と作文教育の2本柱とした。著者の意味する「作文教育」は、教師から与えられた課題について書く観察文・報告文・論説文・感想文などの文章表現指導を指すものではなく、作者が自己の生活から課題を見つけ出し、自己または他者に向かって自由に文章表現し、作品から共に学びあう主体的な活動を指している。

その作文教育は、青年期の発達課題の重要な部分を占める他者理解・自己認識・自己表現と深く関わるものである。また、文学教育との関わりにおいては、読者自らが人生を見つめて文章による自己表現に努力することで、人生の課題を提示する文学作品を自らの人生体験と重ね合わせて理解する学習姿勢を作ることに

なり、その効果を高めるからである。

しかし、初回の講義で、「自由な題名で作文を書き、自分の暮らしや思いなどをお互いに本音で発表しあう学習をする」と説明したところ、多数の学生から「書くのは大嫌い」「書くということがとても苦手」「感想ならよいが自由に書くのは難しい」との感想が寄せられた。

本来、人間は自己表現に喜びを感じる存在であるはずなのに、このような文章による自己表現に対する苦手意識は何に起因するのであろうか。それは、過去において文章による自己表現を肯定的に感じる学習経験を十分に身につけることができなかったことにあるのではないか。また、文章による自由な自己表現が苦手という事は、青年期における発達課題と大きく関わり、解決すべき問題ではないかと考えた。

本稿は、青年期における発達課題と作文教育の役割

*大阪健康福祉短期大学
〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8
大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科
TEL 072-226-6625

を明らかにし、文章の表現意欲を高め、他者理解・自己認識・自己表現と深く関わる指導のあり方について実践的に研究・考察したものである。

1. 青年期の発達課題と作文指導の役割

(1) 青年期におけるアイデンティティの形成

青年期の発達課題とはアイデンティティの確立であることは広く知られている。

無藤清子は、青年期におけるアイデンティティの形成について次のように述べている。「他の人たちとのかわりのなかで、それに触発されて自分自身の望みや癖や感情や考えといった諸点に気づき、『自分というもの』を感じとっていく、いわば“穏やかな経過”を筆者は想定している」1)「『自分というもの』をたしかに感じ取るということが、それ自体独立に実現するものではないということである。同時に、他者をもひとりの存在（自分と同じように『自分というもの』のある存在）としてたしかに感じとる体験があってはじめて実現されるものである。両方とも『ひと』として感得することである」2)「『自分』を感得しかつ他者の存在を感じ取る感覚を、相互に促進しあうような関係を、人生の過程でいかにもちえるかということが、アイデンティティ形成の上で重要な問題である」3)

また、高垣忠一郎は「人間は自分の感情や気持ちを言語化することによって、はっきりとそれを自覚することができる。また、自分の考えや悩みを言語化して、他者に伝えることによって、相手にそれを理解してもらえ、共に考えてもらうこともできる。人間が自立するという事は、誰の手も借りずに生きることではない。必要な時に他者に理解してもらい、共に考えてもらうことによって、悩みが解決することもある。」4)と述べている。

著者は「書き言葉」は、「話し言葉」よりもある面ではより強く他者と結びつき、相互に理解しあう力を担うと考える。

無藤と高垣の指摘から、著者は、その先駆的な実践として、我が国固有の教育方法としての生活綴方教育を想起する。

村山士郎は「生活綴方では、子どもの書いてきたものは、『うれしかったことも・悲しかったことも』『楽しかったことも・むかついたことも』『不安だったことも・苦悩することも』、そのまま受け止めようとし

てきた。生活綴方では、日本にカウンセリング理論が教育現場に普及する前から、『子どものあるがままを受容』することを実践してきた。」5)「発達課題に正面から向き合い、書き綴ることができるようになることによって、より深い自己認識・人間観を得ることができると考えている。そこから新しい他者理解に通じていく。」6)と述べ、生活綴方教育が自己認識・他者理解と深く関わるものであることを明らかにしている。

次に、学生の作文に対する意識を調査し、その側面から作文教育の意義を考察する。

(2) 学生の作文に対する意識とその理由調査

4月当初に、作文についての意識とその理由を質問紙法により調査した。設問は以下の項目である。

表1 作文意識調査の設問

設問1	あなたは、作文を書くことは、好きですか、苦手（嫌い）ですか。
設問2	「苦手」「やや苦手（嫌い）」と書いた人に聞きます。どういうことで苦手（嫌い）なのですか。その理由があれば、書いてください。
設問3	「好き」「どちらかという好き」と答えた人に聞きます。なぜ作文が好きなのですか。その理由があれば、書いてください。

その結果は、次のようになった。

表2 作文に対する学生の意識状況

項目	人	割合(%)
好き	5	6.5
どちらかという好き	5	6.5
普通	26	33.8
やや苦手	20	26.0
苦手（嫌い）	21	27.2

(3) 学生の作文に対する意識とその理由調査についての考察

①77人の回答者のうち41人（53.2%）が「やや苦手」「苦手（嫌い）」で占められ、「好き」「どちらかという好き」は、10人（13.0%）である。学生の作文に対する「苦手（嫌い）」意識が強いことがわかる。

表 3 作文「苦手」意識の理由

- ・何を書いたらいいかわからない。・内容がまとまらない。
- ・だらだらした文になっていると思うから・文章を書くのが苦手
- ・最後の落ちがまとまらないから。・どのように書いたらよいか分からない。
- ・字を書くのが面倒くさいから。・自分で考えるのがにがて
- ・長く書くのが面倒・テーマに沿って書くのが難しい
- ・、や。の付けるところがわからない。・日本語を並べるのが苦手
- ・自分の意見を書くのが苦手・文をうまく書けないから
- ・自分なりの表現の仕方文章を書けないから
- ・文章が何文字以上って決まっていて書くのが大変。
- ・文章を作るのが苦手・文章が思い浮かばないし、続かない。
- ・うまく書かなければ書き直しをさせられる

表 4 作文の「好

- ・人に話しかけるよりも紙に書いた方が楽な感じがする。
- ・自分の気持ちが書ける。・書くことで自分の気持ちの整理ができるから。
- ・話すよりも自分の考えや思いを書きやすい。
- ・本を読むことや話すことがすきだから・書き出したらだんだん楽しくなってくるから・頭の中に沢山文章が浮かんでくるから
- ・皆に読んでもらえたりするから・おもしろいから
- ・人に自分のことが分かってもらえるから

②「字を書くのが面倒くさいから」「長く書くのが面倒」という「苦手」意識の理由に注目したい。これは「書き言葉」が、「話し言葉」との対比で「面倒」な言語表現であるという点を指摘していると考える。「書き言葉」は、「話し言葉」よりもなぜ「面倒」な言語表現なのであろうか。

小川太郎は、「話しことばでは、一定の場面でそれにかかわることをいい表わすときには、話し手の表情や身振りだけでなく、聞き手がそのなかにいる場面全体が聞き手の理解をたすける。」7)「話しことばは、時間やエネルギーの点からいって制限が少ない。たくさんのことを、短い時間で、気楽に表現することができる。スピードが早いからである。ところが綴方となると、一字一字書いていくのだから、時間やエネルギ

一の点で制限が大きい。したがって、無駄を省き肝心な点にしぼって表現する必要がある。」8)「文字の抵抗ということもあるけれども、それよりも綴方が要求する思考が子どもにはしんどいのである。」9)と述べている。つまり、「書き言葉」は「話し言葉」よりも思考力を要求し、「面倒な」言語表現なのである。それを乗り越えることによって、様々な確かな認識を育てることができる。

③「何を書いたらいいかわからない」「文章が何文字以上って決まっていて書くのが大変」「うまく書かなければ書き直しをさせられる」「テーマに沿って書くのが難しい」「自分なりの表現の仕方文章を書けないから」などの「苦手」意識の理由に注目したい。これは、テストや受験のための「作文」に代表されるように、「書き言葉」(作文)といえ、自らが主体的に「書きたいこと」を見つけて個性的な表現によって書き、積極的に自己主張する手段ではなく、たえず他者から出される課題に応じて「書かされる」という消極的・受身的な存在として感じていたことを示している。その結果、作文に対して自信を失っていると考えられる。

④「書くことで自分の気持ちの整理ができるから。」「(書くことで)頭の中に沢山文章が浮かんでくるから」「自分の気持ちが書ける。」という「好き」意識の理由に注目したい。これは、「書き言葉」(作文)が自己理解の機能を持つことを示している。

岡本夏木は、「書くことによって、子どもは自己というものが表現できる存在であることを知ってゆくと共に、さらに自己をいっそうよく理解し、自己を築いていく。『書く』ことのもつ自己理解の機能は、自己形成の途上にある子どもや青年においては私たち大人以上にはるかに重い役割を果たす。」¹⁰⁾と述べている。

⑤「人に話しかけるよりも紙に書いた方が楽な感じがする。」「話すよりも自分の考えや思いを書きやすい。」という作文に対する「好き」意識の理由に注目したい。

これは、「書き言葉」(作文)が「話し言葉」よりも人間の表現の自由を拡大することを示している。小川太郎は、生活綴方(作文)を書くことが、子どもを自由にするということに注目し、「それは、語るときは相手を目前にして語るなのであって、相手からの拘束があるが、書くときには、けっきょくは人に読まれるものではあっても、さしあたりは相手を目前にもっておらないために、相手にとらわれることが少ないと

いうことである。この相違は、人に知られたいこと、自分だけの心にしまっておく方が安全だと思われることがらについては、はっきりと表われる。」11)「真実を相手に向かって言うことができなくされつつある子どもに、相手のいないところでせめて綴方の中にも、真実を書かせようというところから、自由に認識し表現する力を育て」12)られる、と指摘している。

⑥「皆に読んでもらえたりするから」「人に自分のことが分かってもらえるから」という「好き」意識の理由に注目したい。これは、作文は、「書かされる」という消極的な存在ではなく、進んで自己を他者に語ることによって、自己の感情・認識・思考を伝え、他者から理解や共感を得ることができる存在であることを体験的に述べているものである。その体験が「好き」意識に結び付いているのである。

⑦以上の作文の「苦手意識」「好き意識」の理由の分析から、作文教育が、学生の内言語をより活性化させて自己認識を深め、自由に自己表現する力を育て、書き手と読み手の関係において人間的な感情・認識・思考を共有することができることを見た。すなわち、著者の意図する作文教育は青年期におけるアイデンティティの形成に少なくない役割を果たすと考える。

3. 学生を対象とした自由な自己表現としての作文教育実践

以上の考察により学生を対象とした作文教育を実践した。

(1) 自由な自己表現としての作文を書く

学生たちには、事前に、以下の諸点について明らかにしてスタートした。

①自由課題作文を書く目的は、自己の生活や思いを見つめ、自由に自己を表現することにより、自己の成長をめざす。また、お互いに生活や思いの真実（本音）を知り合い、交流し学びあい、より緊密な関係を深め、集団の成長をめざす。

②作文を書くことは、自己を表現する自由と権利である。したがって、題名・テーマ・内容・表現方法・字数は自由であり、書きたくないこと、知られたいことを無理に書く必要はない。また、書く自由もあるが、書かない自由もあり、発表するかしないか、どのような発表をするかも自由である。

③書かれた作品は、作者の了解を得て、数回に分けて文集に載せ、クラスを単位とする集団で読みあい、作品についての意見・感想を交流する。

④「書く時間」は、2週間の内容を考える期間の後、45分をあて、その時間に書ききれない場合は、持ち帰り学習とする。

その後、6月に1回目の「作文を書く時間」を設定した。だが、2週間の準備期間があったにもかかわらず、その日に作品を書き上げて提出したのは、参加した学生77人中、57人であった。他の20人については、書く意志はあるが「書く事が見つからない」「もっと考えて家で書きたい」との理由であり、後日の自由提出とした。「書きたくない」という理由は1人もなかった。欠席者には、後日、個別に指導することにした。こうして、1回目には70人が作品を提出した。

(2) 1回目の作品群のテーマ別分類とその傾向と特徴

6月の1回目の作品は、どのようなテーマ内容であったか。

作品群のテーマ別分類は容易ではない。分類判断に苦しむ作品もあるし、1つの作品に複数のテーマが存在することもある。分類する人の主観的判断により左右される。しかし、作品群のテーマを分類することによって、大まかではあるが、作品群の傾向と特徴を知ることができ、書き手集団の関心がどこにあるかを見ることができる。次の表は、1つの作品に存在する複数のテーマをカウントしての数値である。

表5 作品群のテーマ別分類
(割合は、1回目の作品数70を基礎とする)

テーマ(例)	作品数(作品)	割合(%)
友情	16	22.9
家族愛	15	21.4
高校生活体験	13	18.6
辛い体験(死・不登校・親の離婚・失恋・挫折体験など)	12	17.1
学生生活(バイト・下宿・教習所・通学など)	11	15.7
特技・趣味・熱中体験	9	12.9
恋愛	7	10.0
将来の仕事・夢	5	7.1
ペット愛	4	5.7
生い立ちをふりかえる	4	5.7
死(家族・ペットの死)	4	5.7

作品群のテーマの傾向と特徴

- ①友情の大切さとつながりを求めた作品が22.9%と一番多くあった。友人関係について高い関心を示すのは青年期の特徴のひとつである。
- ②家族の紹介と感謝、家族関係の重要性などを述べたものが21.4%と多くあった。それには、思春期における親への反抗を振り返りつつ親を一人の他者として評価する内容が多く見られた。
- ③高校時代を振り返る作品が18.6%あった。作品を書いたのが高校生活を終えて間もない大学1年の6月であったことにもよるが、高校時代を総括することによって大学時代を前向きに歩もうとする姿が見られる。
- ④離婚・家族やペットの死・友達との不和・不登校・いじめ・失恋・夢の喪失など辛い体験・挫折体験を語る作品が17.1%みられた。自己の辛い体験を直視し、他者集団を信頼して自己表現したこれらの作品を丁寧に受け止めなくてはならない。
- ⑤学校生活の様子や悩みを扱った作品が15.7%あった。作品を書いた時期が、大学生活が始まって間もない時期であるので少ないが、今後はこのテーマが多くなることを予測させる。
- ⑥過去の恋愛体験や現在の恋人の紹介をした作品が10.0%あった。青年期の特徴を示している。
- ⑦自分の将来の仕事や夢を語るものが7.1%あった。そのうち保育士を目指すものが多かった。
- ⑧すべての作品が、現在の暮らしや今までの人生を振り返り、ふざけたりごまかしたりすることなく真面目に書いていた。
- ⑨作品には、多くの他者が読むことを前提として、もっと自分を知ってほしいという気持ちが表われていた。
- ⑩普段の授業における意見や感想からは直接、窺い知ることが出来ない個人の過去と現在の生活、感情、思いが表現されていた。
- ⑪私的な体験が中心であり、平和・福祉・貧困など社会問題を抽象的に述べたものはなかった。

(3) 作品を読み合う授業の実際

各クラスでは、作品に指導者のコメントを添え6回に分けて文集で紹介した。作品を文集に載せるにあたっては作者の自発性と了解を十分に確認し、家族のプライバシーに関わるものは家族の了解をも取るように

指導した。

作品は、作者の了解を得て指導者が朗読した。朗読中は、普段の授業中に見られた私語や居眠りなどが皆無となり静まり返った。作品によって反応は様々であったが、毎回、共感の笑いや、目頭を押さえる姿などが見られた。

その後、作者への質問や作品の感想を自由に発表し、まとめとして各自が感想文や作者へのメッセージとして書き、集約し、次回にはその感想文の中から代表的なものをピックアップして紹介し、更に交流を深めた。以下、その作品例を幾つか紹介する。

なお、本稿への作品掲載については、作者の了解を得ている。

作品例

おかん

A (男子)

僕はおかさんを尊敬しています。

僕の家はお父さんがいません。小学五年生の時に家を出て大阪に来て、お父さんとおかさんが離婚するまでに五年かかりました。五年間、いろいろなことがありました。けれど、おかんは一度も弱音をはいたことがありませんでした。僕たちがつらく泣いていても、おかんは涙を見せずに僕たちを支えてくれました。

でも、一度だけ、おかんが泣いたことがありました。離婚して、名字を変えるとき、お姉ちゃんと僕がケンカをしていました。お姉ちゃんは、「名字を、高校三年生で卒業するまでは変えたくない」と言っていて、僕は、「おかんが頑張ってるから名字を変えてあげようや」と言い合っていました。その時に、おかんが話に入ってきて、三人で話していました。

その時に、おかんが泣きながら、「私がおらんかったら、こんなことにならんかったのにな。ごめんな。」と言いました。

それを聞いたとき、ほんまにつらかった。おかんが、ほんまに泣いているのをはじめてみたときでした。今では、お姉ちゃんと僕と妹で楽しく暮らしています。決して裕福じゃありません。妹は障害を持っていて、今、足を骨折し入院しています。おかんは疲れきっているけどがんばっています。はやくお金をかせげるようになって、おかんに楽をさせてあげたいです。

著者はこの作品をどうみたか

作者は、幼い時から両親の不和と離婚という家庭事情に、長期間悩み苦しんできた。名字換えをめぐる姉と葛藤し、弱音を吐くこともなくがんばってきた母親の泣く姿に心を痛めている。障害を持っている妹をかばい、疲れきっている母親の気持ちに寄り添い、それでも頑張りぬいて生きている母親を「尊敬しています」と言い切る作者の姿に深い感動を覚える。

しかも、作者は母子家庭であることからくる様々な困難と向き合いつつ大学生を送り、将来の仕事と生活の意味を見据えている。

作者は、この自己の体験を振り返り、文章化することにより自己の立つべき立場を明確にすることができた。

この作品を読む学生は、作者に共感と励ましの言葉を送ることであろう。そのことが、作者をさらに励まし自己の生き方に対する確信につなげるであろう。

また、クラスには、彼と同様に単親家庭の困難を抱えている学生や、生い立ちにおいて別の辛い体験や挫折体験をしている学生も少なくない。したがって作者の辛い体験を直視し積極的に生きようとする姿は、同様に辛い体験を抱えている読者を励まし、自分にとって「何をこそ書かねばならないか」という問いを受け取ることになるだろう。(事実、この作品を読みあった後、自分も自己の抱え込む苦しみをもみんなに聞いて欲しいと、自分の辛い体験とその思いを書き、文集に応募した学生が現れた。)

さらに、作者の私的体験にとどめず、単親家庭など社会的弱者を支援する福祉社会のあり方にまで問題意識を高めて欲しいと考える。

「書く力」という面に限定して語れば、自己の文章表現が指導者と同級生の共感で受け入れられる体験は、次の文章表現の意欲を高め、それは文章表現力向上の前提にもなる。だが、作品における文章表現技術の稚拙さを批判することはすべきではない。それは作者の「書きたかったこと」(内容)から目を背けるとともに表現意欲を削ぐことになる。もし、文章表現を問題とするならば、作者のその書かれている文章に注目し、その文章があるからこそ分かる様子や感情を高く評価すべきである。

この作品に対する学生の受け止め

では、この作品は、学生にどのように受け止められたであろうか。学生の感想文から抜粋して紹介する。

①辛い体験を直視し、文章で自己表現した作者の勇氣に感動し励ましを送る学生が多くいた。

例

「私も一生消えない悩みを持っています。なんで私だけと思うがきつと意味があるのだと今はそう受け止めています。みんな一人ひとり言えない事があると思います。それを作文にできるって、とても勇氣をくれるし、なんか安心できます。文章で伝えるってすごい。口で伝えるよりも心に響きます。」(女子)

「なんかすごく感動した。言葉で言い表せられないほど感動した。本当にお母さん思いたと思った。」(女子)

「色々聞いていたけど、この話を聞くと、いつも自分がちっぽけに思う。これからもお互い頑張ろうね。」(女子)

②作者の家族を思う気持ちの優しさに感動し、自分の家族に対する思いを振り返る学生が多くいた。

例

「親を思う気持ちとか大変さが伝わってきた。」(男子)
「涙が出ました。私は独り暮らしをしているので、家族に接する機会はメールか電話しかありません。だから、親の頑張りや気持ちを見たり聞いたりする機会がないので、〇〇君の作文でそのことについて本当に考えさせられました。ありがとうございます。」(女子)

③作者と同様に親の離婚に苦しむ学生が励まされ、自己を直視する機会を得た。

例

「私も去年、親が離婚したのでその時、色々あった事を思い出し、また涙が出ました。私の家も離婚の時、すごくもめていました。私にとってはどちらも大切なお父さんお母さんなので悲しかったです。でも〇〇君は、私と違いすごく色々考えているので、えらいと思いました。」(女子)

さらに見えてきた学生の暮らしと思い

この「おかん」の作品を書いたこの男子学生は、夏休みを終えた直後、さらに「バイトと魔の半クラッチ」

という題名の作品を書いた。

バイトと魔の半クラッチ

A (男子)

今年の夏休みはバイトばかりしていました。

朝三時五十分に起き、ご飯を少し食べて家族のみんなを起こさないように四時十五分頃そうと家を出ます。外はまだまっくらで車の数も少なく人もいません。その中、音楽を聞きながら四十五分間自転車をこいでバイト先まで行きます。行く途中、朝早いと、警察官に何度も止められました。けれど、何度か同じ警察官に会ったので顔見知りになり、「がんばってな。」とはげましてくれる人がいました。ちょっとうれしかったです。そして、四時四十分ぐらいになると朝日が出てきて空に虹がかかったように空を明るく染めます。それはとてもきれいで毎日見るのが楽しかったです。

そんなことを思っている間にバイト先に着き、五時から十一時半まで働きます。バイト先の人たちは六十歳過ぎている人から一番若くて十五歳の子が働いています。けれど、みんな仲が良くておもしろい人たちばかりです。だから毎日楽しく働くことができました。

そして、午後一時からまたバイトがあるのでそれまで少し休憩をします。午後一時からのバイトは朝働いた場所からすぐ近くの場所で、働いている人もほとんど同じです。しかし、このバイトは外で働くのでやる人があんまりいません。いるのは中国人、モンゴル人、インド人とかです。みんな暑い中でがんばって働きます。暑いから汗がめっちゃくちゃ出て、のどがすごくかわきます。こんなバイトなので水分がたくさんいります。だから、朝のバイトの時に一緒に働いているおばちゃんが、わざわざ凍らせて水をたくさん持ってきてくれて自分にくれてすごく幸せな気持ちでした。だから、暑くてもがんばれました。そして、午後五時に終わって家に帰ったらすぐ寝ていました。そして、また朝起きてバイトに行くみたいな生活を続けていました。

夏休みの終わり頃にバイトを休んで車の仮免の試験を受けに行きました。技能のテストはすぐに受かるやろうと思っていましたが、坂道で四回エンストして強制終了。半クラッチが上手くできません。けれど、仮免を取らないと次にいけないので違う日に試験を受けに行きました。またまた坂道で半クラッチが上手くできなくて発信を失敗し不合格でした。いつになったら仮免がとれるのか不安です。半クラッチが嫌いです。

でも車の免許はほしいです。今年中に免許がとれるようにがんばろうと思っています。

バイトは楽しく、半クラッチには悩まされた夏休みでした。

残念ながら、この作品を教室で紹介し、学生達の意見交流をする機会はなかったが、この作者とは個人的に話をすることが出来た。それによると、短い夏休みであったが、連日、スーパーの倉庫に詰まれた商品の整理や運送関係の肉体労働をしたとのことであった。その目的は、家族の生活費と自分の学費を稼ぐためであり、それは授業が始まっても続いているという事であった。車の免許を取る理由も遊び目的ではなく、現在と将来の生活のためであった。

本学の学生達が置かれている厳しい勉学条件を垣間見て、著者は胸を打たれた。それは、彼ばかりではない。多くの学生の作品に共通している。例えば、通学状況にもそれが見える。学生Bの「電車通学」という作品を紹介する。

電車登校

B (男子)

電車にゆられて一時間、今でもやっぱり朝起きるのがつらい。

朝の6時30分に起きて朝ごはんを食べていつもの駅に行く。高校生活にくらべて朝起きる時間が早くなった。高校では朝の8時20分に起きても余裕で1時間目には間に合う。今となっては、こんなに早く起きて、電車の時間に合わせなくてはならない。

でも、学校が始まった時は正直にとてもうれしかった。朝早く起きてしっかり朝ごはんを食べて電車が来る5分前には駅のホームにいて満員の電車に乗る。そして、友達と話しをしながら一時間かけて堺市駅に向かう。駅に着いたら、いつものローソンに行って学校へ行く。これって、やっぱり大学生になったんだなあっと、実感する。

が、それも始めだけだった。それからは、毎朝、電車の時間を気にし、電車の中では乗り過ぎないように眠る。やっぱり高校生活が一番楽しくてよかったと思ったこともあった。

ですが、やっぱり自分が行きたい学校に行くので、二年間はがんばって電車に乗り続けたいと思う。

今では、サラリーマンなどは鳳や東岸和田で降り

ていくので、サラリーマンの前に立って降りるのを待つ自分がすばらしく成長したと思います。さすが電車登校。

6月に書いた作品である。大学生活が開始され、緊張と希望を抱いて通学している姿に好感を持つ一方では、毎日2時間の満員電車で通学する現実の厳しさを感じる。

この作品を読み合ったとき、苦勞しながらも勉学に努力する作者への励ましとともに、自分自身が同じ境遇であることを述べる学生が少なからずいた。中には、往復3時間という学生がいて、授業が終わると同時に急いで帰宅する現状を語っていた。

今年度より初めて本学の学生達に講義することになった著者にとって、ときどき見かける疲れた表情が気になっていたのだが、その背景の一端を知ることができた。そして、学生達を以前にもまして愛おしく感じることができ、今日の社会的貧困が学生生活に及ぼしている現実を直視する必要を痛感した。紙面の都合で多くの作品を紹介できないが、学ぶべき点はこれ以外にも多く存在する。

4. 作文教育に対する学生の評価

(1) 毎回の授業後の感想文から

学生が作文教育をどのように評価したかは、作文を読み合う授業における毎回の感想文から伺うことができる。その特徴を以下の6点にまとめた。

①辛い体験・挫折体験を乗り越えて生きている作者に共感し励ましを送る感想やメッセージが多く見られた。

例

「感動した」「泣いた。」「涙が流れそうになった」「胸を熱くした」「心に響いた」「同感です」「すごく共感できた」「心がぐっときた」「自分も同じ体験がある」「人それぞれ色々な過去があって、それを乗り越えてこそ今この場にいるのだと思った。」「本当に優しい人は、きっと、辛いこともたくさんあった人。みんなのふとした時の優しさや毎日の中での小さな優しさは、そういうところから出てくるんだろうなあと思った。」

②他者理解を通じて、それを自分の成長と結び付けて

いる感想が多く見られた。

例

「自分の体験と重ねて読んだ。」「作文を読むと、そのことを自分に置き換えて考えてしまう。」「色々な話を聞けて、私も成長できた。」「これからもっと、家族とか友達とか、そのほか色々なものを大切にしていこうと思った。」「私もつらい時や後悔する時があったら、プラスに変え、自分らしく生きたい」

③普段のつきあいではわからなかった他者理解が作品紹介によって行われ、深まったという表現が多く見られた。

例

「人には自分とは違った色々な個性があることを知った。」「みんなの思っていることが伝わった。」「今まで皆のことを表面しか知らなかった。もっと知りたい。」「みんなの知らない所を知ることができた。」「友達に対する見方が変わった。」「みんなも色々なものを抱えていることに気づかされた。」「今、こうして一つの教室にいて、いつもと変わらず授業を受けて、また明日になれば、またこの教室で授業を受ける。毎日、みんなと一緒に居る。でも、一人ひとり、想いがある。私は、今回文集に載っていた人たちのことは、初めて知りました。この機会があったからこそ知れたことだと思う。」「みんなすごく優しい心を持った人たちだと思った。」「みんな真剣にこの学校に来ているんだと思いました。」

④「書き言葉」という表現の独自性・優位性を実感した感想が多く見られた。

例

「普段恥かしくても言えないことが作文を通してなら言える。」「やっぱり作文を書くっていいと思った。」「自分の思いを文字にすることはとても良いことだと思った。」「作文だから分かる、作文だから素直に書けるのかな。」「文じゃないと伝えられないことがあるとわかった。」「自分の気持ちを文字で表わすことによって何かが伝わってくるし、自分も何かを伝えることが出来ると思った。文章ってすごいなあ。紙一枚でこんなにも感情が動くと思わなかった。途中、泣きそうになった。」

⑤作文を読みあうことでクラスの人間関係の深まりと連帯の強化に関わっての感想が多く見られた。

例

「クラスの仲が深まりあえた。」「作文を読んで、みんなともっと仲よくなれたらいいな、と思った」「これから二年間、このクラスで頑張っていきたいと思った。」「みんなで支えあって卒業できたらええなと感じました。」「つらい時はクラスの皆誰にでも相談したらいいと思うし、いつでも頼って来て欲しい。それが友達として当然のことだ」

⑥自分の様々な体験や思いを、勇気を出してクラス集団に発表する大切さについて述べた感想が多く見られた。

例

「自分の体験や思いをみんなに伝える勇気を感じた。」「自分のつらいことを文にしてみんなに読まれるという事は、とてもすごいことだと思う。」「みんなの前で発表できる堂々に感動した」「自分の気持ちを誰かに伝えることは、少し照れくさいけど、少しでもわかってもらえることは嬉しいこと。」「文章を書くのは苦手だが、自分の気持ちや考えをみんなに伝えていきたいと思った。」

(2)作文教育終了時におけるアンケートから

作品を読みあう授業が終了時に、学生から今回の作文教育を受けた感想を集約した。以下は、その結果である。回答者数は69名であった。

アンケートについての考察

①「今回のような作文の授業をうけて、よかったですか。」という質問に対して、100%が「とても良かった」と「だいたい良かった」と答え、授業の満足度が高いことを示している。

②「自分を見つめ、自分の立場や自分の考えをはっきりさせることに役に立つ」96%・「友達を理解するために役に立つ」99%・「クラスの仲間作りに役に立つ」93%の学生が答えている。

作文教育の当初の目的を「自己の生活や思いを見つめ、自己を自由に表現することにより、自己の成長をめざす。また、お互いに生活や思いの真実(本音)を知り合い、交流することにより学びあい、より緊密な

関係を深め、集団の成長をめざす。」としたが、その効果があったことを示している。

③「自分を好きになることに役に立つ」と41%が答え、自己肯定感を高めることに効果があることを示唆している。しかし、「わからない」と58%が答えていて、高い効果を得るためにはもっと時間が必要であると考ええる。

④「過去に、今回のような作文の授業を受けたことがある」と答えているのは25%であり、多くは、今回が初めての体験であったことを示している。

⑤自由表記では「このような作文の授業を1年間通してやって欲しい」「また作文を書きたい」など書いた学生が14人(20%)いた。「以前は作文が嫌いだったが授業を受けて好きになった」などと書いた学生が10人(14%)いた。当初の調査に見られた作文の「苦手」意識の克服に、今回の実践が少なからず貢献できたのではないかと考える。

表6 今回の作文教育を受けた感想

質問項目	回答
1. 今回のような作文の授業をうけて、よかったですか。	とても良かった 59人(86%) だいたい良かった 10人(14%) 良かったと思わない 0人(0%)
2. 今回のような作文の授業は、自分を見つめ、自分の立場や自分の考えをはっきりさせることに役に立つと思いますか。	役に立つと思う。 66人(96%) 役に立たないと思う。 0人(0%) わからない 3人(4%)
3. 今回のような作文の授業は、自分を好きになることに役に立つと思いますか。	役に立つと思う。 28人(41%) 役に立たないと思う。 1人(1%) わからない 40人(58%)
4. 今回のような作文の授業は、友達を理解するために役に立つと思いますか。	役に立つと思う。 68人(99%) 役に立たないと思う。 0人(0%) わからない 1人(1%)
5. 今回のような作文の授業は、クラスの仲間作りに役に立つと思いますか。	役に立つと思う。 64人(93%) 役に立たないと思う。 1人(1%) わからない 4人(6%)
6. 過去に、今回のような作文の授業を受けたことがありますか。	あった 17人(25%) なかった 42人(61%) わからない 10人(14%)

5. おわりに

学生に対する今回のような作文教育が、青年期の発達課題に応え文章表現意欲を高めるための有効な教育方法だという事を明らかにしてきた。しかし、問題点を次のように考える。

①自由に作文を書き、文集にして授業で読み合い話し合うという指導は、多くのエネルギーと時間を必要とする。本学のように1クラス40人という定員が指導の限界であろう。現在よりもクラス定員を減らすことで指導の質的向上が保障されると考える。

②「作文を書く時間」を2回設定した。2回目の作品は1回目の作品と比べると全体に質的・量的向上が見られた。それは、互いに作品を読み合う中で題材が広がり、表現意識と表現技術が高まってくることを示している。

③また、「作文を書く時間」を2回設定したことは、1回目には作品を提出できなかった学生に、再度、書く機会を与えることができ、受講者の全員にあたる82名の作品が完成することになった。今後、作文教育を豊かに発展させるためには、「書く時間」「読みあう時間」を日常的・長期的に確保することが望ましいことを示している。

③文学教育と作文教育との相互の関連については今後の研究課題である。

〈謝辞〉

今年度の作文教育の実践に当たって、本学子ども福祉学科「文学」の前任者、大坪和夫先生からは温かい助言をいただきました。また、クラス担当アドバイザーの野村 朋先生、高砂 朋子先生からは貴重な示唆と励ましをいただきました。深く感謝申し上げます。

(いちづか まさひろ 本学非常勤講師)

【注】

- 1) 無藤清子, 2001, 「青年期とアイデンティティ」『アイデンティティ』日本評論社 P 54
- 2) 無藤清子, 2001, 「青年期とアイデンティティ」『アイデンティティ』日本評論社 P 55
- 3) 無藤清子, 2001, 「青年期とアイデンティティ」『ア

イデンティティ』日本評論社 P 56

- 4) 高垣忠一郎, 1991, 『揺れつ戻りつ思春期の峠』新日本出版社 P 99
- 5) 村山士郎, 2007, 『現代の子どもと生活綴方実践』新読書社 P 54
- 6) 村山士郎, 2007, 『現代の子どもと生活綴方実践』新読書社 P 54
- 7) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 111
- 8) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 112
- 9) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 112
- 10) 岡本夏木, 1986, 『ことばと発達』岩波新書 P 120
- 11) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 38
- 12) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 38

【引用文献】

- 1) 無藤清子, 2001, 「青年期とアイデンティティ」『アイデンティティ』日本評論社 P 54
- 2) 無藤清子, 2001, 「青年期とアイデンティティ」『アイデンティティ』日本評論社 P 55
- 3) 無藤清子, 2001, 「青年期とアイデンティティ」『アイデンティティ』日本評論社 P 56
- 4) 高垣忠一郎, 1991, 『揺れつ戻りつ思春期の峠』新日本出版社 P 99
- 5) 村山士郎, 2007, 『現代の子どもと生活綴方実践』新読書社 P 54
- 6) 村山士郎, 2007, 『現代の子どもと生活綴方実践』新読書社 P 54
- 7) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 111
- 8) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 112
- 9) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 112
- 10) 岡本夏木, 1986, 『ことばと発達』岩波新書 P 120
- 11) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 38
- 12) 小川太郎, 1967, 『生活綴方と教育』明治図書 P 38

【参考文献】

- 10) 大坪和夫, 2005 「文集・あすなろの詩」大阪総合福祉専門学校 児童福祉科

A Study of the Problems of Adolescence and Teaching a Composition

Masahiro Ichizuka*

Summary

I have set the contents of my lectures on “literature” focusing on both the appreciation of literary works and the training of writing. My aim of teaching how to write a composition is not only to make students write on the assigned theme passively, but also to set the students following activities, ① the students select a theme from their own lives. ② the students express their own thinking on the theme freely. ③ the students read their compositions to others, so that they can learn mutually by exchanging their thinking on the theme.

Writing a composition is closely related to understanding others, self-recognition, and self-expression, all of which exerts a deep influence on the developmental process of adolescence.

Whether students think they are good at, or poor at writing a composition depends on the background of the past education of writing. It is the reflection of the students’ positive or negative past experience in writing lessons.

In order to prove the above, I have taught my writing classes in the following way,

① setting enough time for students to write a composition freely, ② grasping the characteristics obtained through the analysis on the theme of a literary work, ③ setting time for reading one another's compositions in groups. ④ exchanging together what the teacher and students have learned from each composition.

Keywords: a problem for the development of the adolescence, understanding others, self-expression, education of writing a composition

*Osaka College of Social Health and Welfare
〒590-0014 8-2 Tadei-cho, Sakai-ku, Sakai City, Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Education